

Vol.007 北欧ロマネスク中世木造教会

1. フィヨルドの谷間に佇む中世の木造宝：ノルウェー・スターヴ教会を巡る旅

ノルウェー西部、深いフィヨルドの奥底には、氷河に削られた碧い水面と断崖が織りなす壮麗な景観が広がる。その縁に、まるで竜が静かに眠るかのような、幾層にも折り重なる屋根を持つ木造教会がそっと建っている。それこそが“スターヴ教会 (Stave Church)” 柱 (stav) で支える木造の中世教会である。11～13 世紀、バイキング時代の装飾美術とロマネスク様式が融合した北欧特有の建築様式は“北欧ロマネスク”とも呼ばれ、かつては 1000 を超える教会が存在したが、現在残るのはわずか 28 棟。その多くは交通アクセスの難しいフィヨルドの奥地に佇み、訪れる者に“秘境感”と“歴史の息遣い”を共に届けてくれる。

2. 竜の鱗をまとう教会：ボルグンド・スターヴ教会

ラルダール (Lærdal) 村を訪れた先に広がる牧草地。その中心に建つのが、「ボルグンド・スターヴ教会 (Borgund Stave Church)」だ。1180 年代に建造されたこの教会は、28 棟の中でも最良の状態を保っており、「保存のプロトタイプ」として知られている。切妻屋根が重なりあい、屋根の端には龍の頭が掲げられている。ウロコのような木片葺き (シェイク材) は、バイキングの民家建築の技を継承し、まるで竜の甲殻をまとったかのような趣を漂わせる。内陣にはロマネスク風の静謐な空間が広がり、丸柱や梁に絡む植物文様の彫刻は、光と影の中で神秘を呼び起こす。ラルダールからラルダール川沿いに車で約 40～60 分、観光拠点として便利な町には木造家屋が残る旧市街や複数のホテルもあり、歴史探訪と自然散策の拠点として理想的だ。近くにはかつての王の道「ヴィンデルヘーヴェゲン」でのハイキングも楽しめる。

3. 世界遺産の真髄：ウルネス・スターヴ教会

フィヨルドのさらに奥、ルストラ (Luster) 地域のウルネス村にあるのが、「ウルネス・スターヴ教会 (Urnes

ネクストブレイク的に今はあまり知られていない、街や地域をご紹介します。観光客があまり訪れることのない魅力的な地を旅することは、旅本来の楽しみ、醍醐味を教えてください。

AUTHENTIC TRAVEL
プランナーズ EYE

Stave Church)」現存するノルウェー最古のスターヴ教会で、1130 年頃に建造されたとされる。この教会は、ケルト美術、バイキング装飾、ロマネスク建築という三者の美意識が木の造形で融合した傑作。特に北側の扉口 (ノースポータル) には、絡み合う蛇や獣の彫刻が施され、後の“ウルネス様式 (Urnes style)”の原型となった。



Urnes Stave Church

内部には 12 世紀の柱頭彫刻や、中世の礼拝具 (リモージュの燭台、十字架像など) が保存され、当時の宗教文化と芸術的水準が今なお伝えられている。1979 年にはユネスコの世界遺産に登録され、その保存と観光管理は厳格に行われている。2024 年には訪問者数の上限や詩の散策路設置といったサステナブルな措置も導入されている。



教会内部の梁や柱の端部に施された彫刻

管理は厳格に行われている。2024 年には訪問者数の上限や詩の散策路設置といったサステナブルな措置も導入されている。

4. 文化の深層と北欧が抱える課題

12 世紀にノルウェー王国の首都も担ったことのあるベルゲンは一般観光では世界遺産のブリッゲン地区やロープウェイでの展望台などがその中心となっているが、その外れにあるベルゲン大学校内にある歴史博物館を訪ねると、ノルウェー各地の中世木造教会スターヴ教会に残っていた板絵やキリストの像などやウルネス教会にあったマリア像などが展示されているのでぜひ足を運びたい。木造教会に残された装飾を見ているとケルト文化との関連性にも興味がわく。絡み合う曲線や渦巻き文様、動物のモチーフなど、共通点が多い。ケルト自体は紀元前に中央ヨーロッパで広がり、海や川を主要な交通網とし、あとにブリテン島やアイルランド諸島などに拡散していった。そこはバイキングの勢力エリアでもありお互いに影響し合ったものと推測され、実に興味深い。

スカンジナビアのツアー実態と今後への期待

北欧スカンジナビアは日本でも好感をもって受け入れられてきた自然豊かな土地であるにもかかわらず、このエリアへのツアー形態は 50 年前からほぼ変化が見られない。ヨーロッパ諸国へのツアーが首都を巡る周遊型から一カ国のデスティネーションへと移り、

その国の特定の地方をじっくりと巡るようになってきているのに対し、北欧スカンジナビアへの旅は冬場のオーロラのツアーが加わったぐらいで、観光シーズンも 6 月から 8 月に限られた定番の周遊コースだけである。スカンジナビア諸国が観光の大量送客による経済性よりも美しい自然保護をベースとしたサステナブルな観光政策を取ってきたことが主たる要因だが、フィンランドを除いて日本に政府観光局を開設することなく、彼らの文化やシーズンそれぞれの魅力などを訴求してこなかったことは大きい。日本の旅行会社も人気のある観光地の受け皿的なツアー作りだけではなく、世界各地の魅力を自らが発掘してマーケットに啓蒙していく姿勢を持つことは、これから旅行業が生き残っていく上には必要不可欠な時代であることを認識するべきである。北欧スカンジナビア諸国はこれまで十分な紹介がされてこなかった分、成熟した日本マーケットにおいても開拓していきたい新鮮な価値のあるデスティネーションだ。



Borgund Stave Church